

自閉症の女性を安楽死させた医師たちが無罪となる

——医療倫理について、Gretchain の私見とともに

Wesley J. Smith

February 5, 2020



世界を通じて医療倫理の危機を訴えるウェズリー・J・スミスが、次のように言っている。まず、これをお読み願いたい：——

私の言った通りになった。

重いアルツハイマー病のある患者が、生き延びようともがき、その家族によって抑えつけられたとき、あるオランダの医師は、この女性を安楽死させた。しかし、この医師は殺人罪にはならず無罪放免となり、何と法廷によって称賛されるということがあった。

私はこれを知っていたので、ベルギーの裁判官たちが、自閉症のために、甚だしいうつ病になっていた Tine Nys を、彼女の希望通りに、3人の医師が安楽死させたときも、彼らを処罰はしないと予想していたが、その通りになった。タイム誌の報道では：——

女性の家族による刑事訴訟は、最初、下級裁判所で認められていたが、結局、拒否されることになった。

これは弁護士団側を怒らせた事件だった。彼らのある者の考えでは、ある保守的な政治権力をもつ者が、この事件を法廷に持ち出そうとしており、「市民による陪審員」がそれを裁く制度になっていた。

「これは、そのような難しい課題を背負わされた医者たちすべてにとって、都合のよい有難いものであった」と、弁護士 Walter Van Steenbrugger は言った。「もしこれが反対の裁定になったら、多くの医者が、本当に困ったことになるところだった」と、彼は言った。それは、もし安楽死が、万一、殺人に相当するようなことになれば、安楽死は（今のように）気楽に使えなくなくなる、という意味である。

何と胸の悪くなる、しかし驚くに当たらない話であることか！ オランダでの、そして今ベルギーでの、有罪化拒否の動きがあった後で、どんな他の、死刑に値する医師も、起訴されることはないと考えねばならない——いかに彼らが、法的に許される安楽死の限界をはるかに超えていようとも。

今、わかっていたただけだろうか——保護的なガイドラインとか、いわゆる規制として、この法の擁護者が厳かに、濫用はしないと約束する、その約束の問題は、全く用をなさない只の看板であることが！ ひとたび、医療化された殺しが、法的に認められ、社会的に受け入れられたときには、死は、すべてに勝るパラダイムとなり、傷つきやすい人々の生命を保護するものではなくなる。

Greatchain による見解：

ウェズリー・J・スミス氏（本来、「科学の革命」論者）や、他の論客による、同趣旨の主張がよく見られるようになった。これには、それだけの理由があるからであって、このブログでも数回これを扱っている。たとえば、「**シュークレンクや、その徒、医師の良心を否定するエゼキエル・エマヌエルなどは、頑として大真面目に、医療業界内部のすべての異論を押しつぶそうとして、これを文化的パラダイムにまで、押し上げようとしている…**」と言われている。この言い方からすると、これらの医師たちは、ただ自分の意見を述べているだけとは思えない。彼らには、NWO の、大きな権力基盤があるものと見なければならぬ。

むしろそこには、「死の天使」と言われた、ナチスのヨーゼフ・メンゲレの姿が浮かび上がってくる。ただここでは、メンゲルのような、恐ろしい死の手段が取られることはない。明らかに権力者によって密かに黙認されて、ここで取られている方法は、**ほとんど誰も気づかない安楽死**というものだろう。

そこにある悪のアジェンダは、世界的「人口削減」というもので、これを口に出して言うか言わないか、いかにイデオロギーを巧みに使うか、ということはあっても、その内容は変わらない。それを公然と主張する、最も有名な世論の誘導者は、ビル・ゲイツ夫妻である。こういった思想は、「生命倫理」という口当たりの良い言葉によって、うまくごまかされているが、ビル・ゲイツは実は、death panels（死の陪審員）という恐ろしい言葉を、平気で遣っているらしい。スミスの論文にある citizen's jury（市民大陪審）という言葉は、これを指すのだろうか？

ここに改めて、私の実体験から出た見解を述べておきたい。数か月前、私のかかったのは「せん妄」delirium と呼ばれる精神的変調で、これは私のような80歳代の老人に、特に多い病気であるらしいことは、私の調べた文献からも判明した。これは、2つの意味において危険な病気である。1つは私自身にとっての危険、もう1つは私が医療機関によって利用される危険。

私は自閉症にも、アルツハイマー病にもかかったことがないので、コメントすることができない。「せん妄」に近いと思われる「痴呆」のことも、詳しくはわからない。私に言えることは、私が発症した「せん妄」に関するかぎり、私は「ボケ老人」ではなかったということである。そして私が自分を「ボケ老人」ではないと宣言するとき、他の病状の人々も多くは、おそらく同じことを言うのではないだろうか、ということである。

「ボケ」の定義はわからないが、少なくとも私には、全く無意味なものが現れたり消えたりはしなかった。それは確かに夢ではあるが、経験したことのない不思議な夢で、それなりの一貫性と現実性があり、触ることも、（水なら）飲むこともできた。そして、強い、恐ろしい、苦しい感情に支配されるものだった。それはマイナスであると同時に、プラスの感情でもあった。今でもそれが、ある意味で懐かしいものとして残っているだけでなく、私にとっては、それは、人間の芯となる経験を与えるものだった。これが、どれくらい「客観的」なものかはわからない。しかし、あるビデオによる経験者が、それは「タッチャブル」（触れることができる）な世界だと言ったとき、よく納得できた。

私はこういう体験が、医学界（それが何だろうと）によって、無意味なものとして扱われ、それを体験した人間は、何の価値もないものとして扱われるとしたら、非常に残念であり、かつ不当なことだと言いたい。たとえ、その体験者がそれを語らず、語る手段を持っていなかったとしても、同じである。人間というものは、自分の体験を形にできるか否かで、評価すべきものではない。私は音楽の才能を全くもたないが、音楽によって絶えず豊かになり続けている。のみならず、もし医者の世界が、医療者の良心（倫理）を軽蔑するような、思い上がった唯物論に支配されているとしたら、そんなものは即刻、潰すがよい。そんな医療世界は滅びて腐るほど、我々は健全になるだろう。

私のお世話になった病院には、そのような間違った医療哲学をもつ一部の人々の、空気が漂っていたのは確かだと思う。そのような空気がどうか、コロナウィルスのように、広がらないことを祈るのみである